
妄想のハツカ

saepoyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想のハツカ

【Nコード】

N3241Y

【作者名】

saepoyo

【あらすじ】

普通の人間と能力者が暮らす世界。ある2つの国の間で戦争が起こった、しかしそれは意外な結果に終わる。

日本では夏休みが終わり、普通の家庭で育ち、昔から不思議な事は起こるが普通の生活送っていた少女、猪瀬ハツカは遅刻をしかけていた。しかしその日からハツカの周りで様々な大きな変化が起こります。そしてついに、ある問題に巻き込まれ、自分の中の、ある能力が目覚めてしまう。そして、ハツカの生活が少しずつ変わっていく。

「プロローグ」(前書き)

初の投稿です、どうぞ読んでいってください。
主人公は登場しません。

「プロローグ」

ある所に、太平洋に位置する、沖縄ほどの大きさの島にガルポラドとガトリアとゆう2つの国があった。

2つの国は昔からとても仲が悪く、常に大統領同士が喧嘩しあっていたのだ。

だが最初は小さかった喧嘩はやがて、国同士の戦争へと勃発してしまった。

住人は逃げ惑い、兵隊は争い続ける2年にもおよぶ長期戦となっていた。

大統領は自分が勝つためならそんな事などまったく厭わず、最悪の結果をもたらそうとしていたのだ。

そして2年続いた戦いは、兵隊の数、武器の量、地下シエルターなどの

圧倒的な数の差によりガルポラドが、優勢となっていた。

そのあまりの戦力差に大統領は怖気づき、戦いは近いうちにガルポラドが勝利するだろうと、ガトリアの人々も大統領でさえも予想していた。

しかしその戦争の結末は、意外な結果となったのだ。

戦いは2年を過ぎる丁度2日前の事、兵士達の戦いは大統領の了承も無く終わった。

いや、終わらされたのだ。

その2日後に結果が世間に発表された、ガドリアが勝利したと告げられたのだ。

その知らせは、当然ガルポラドの大統領と住人はおろかガトリアの住人にも予想外の結果だった。その上、理由は語られる事は無かった。

だがその後、それ以上に驚愕する事が起こる。

あれだけ怖気づいて隠れていた大統領がいきなり出てきたかと思うと

ガルポラドの人々に向かって

「お前達の国は奪わない、戦いを終えよう」と宣言したのである。

そしてその言葉を裏すけるように、ガルポラドに何もなかった。それ所か、国を復旧させるための資源を全員分送ってきたのだ。

一体ガトリアに何があったのか？勝者の余裕とゆうやつなのか？それはどんなに考えても調べても誰にも分からなかった。

しかしそれから数日後、なんとお互いの兵隊として駆り出されていた

男達が全員帰ってきたのである。 家族は当然泣いて喜びを分かち合った。

そして帰ってきた兵士達は全員、口をそろえて言うのだ。

「黒いスーツを着た男が救ってくれた」と。

その不思議で感動的な出来事は、何故か報道される事はほとんど無かった。

一部の売れない記者だけが、その戦争の事を記事に取り上げる程度であった。

実はこの奇跡の物語の裏には、ある2人の男の活躍があったのである。

しかしその物語は記事にも取り上げられる事はなかった。

そしてこの物語は本編では語られる事は無い。

これは彼らが望んだ事なのだろうか？

一つの初恋の物語が始まろうとしていた。

「プロローグ」（後書き）

次の話では、主人公が登場します
以上プロローグでした。

「遅刻のハツカ」(前書き)

父親と娘ハツカの忙しない掛け合い

「遅刻のハツカ」

ほとんど誰も見ない裏側に、あの戦争の記事が書いてある新聞紙を見ながら

朝っぱらからリビングで酒を飲む一人の男性。

黒く縁取った眼鏡の向こう側は、酔っているのか目蓋が半分下がっている。

その容姿からして日本人であろう男性は、一口二口酒を飲むと机の上にコップを置き。

「ふうん、あの野球選手引退したんだあ……まあ歳だもんね」

呟きながら再びコップを手に取る、彼が見ている記事は当然些細なスポーツドキュメントの一端であった。彼も裏側の記事には、何の感心も向けていない。

酒をまた一口、その時2階の部屋の方から、バタバタとリビングに繋がる階段から響く足音。

そして男性とは対照的な忙しない音とともに一人の女の子が階段から降りてきた。

男性はその女の子の方へ顔を向けて。

「おお、おはようハツカ」

男性は軽くコップを持ち上げて挨拶をした、だが帰ってきた言葉は少しキツイ高鳴り声。

「おはよう……なんかじゃなあい！何で起こしてくれないのパパ！」
黒いスカートは白く汚れ、針金の入ったリボンもグニャグニャな上ボサボサの髪が顔の所々が隠れた状態で怒る。

ハツカと呼ばれた少女は鞆を持ち上げて、黒い眉を怒らせながら自分の父親に向かって叫んだ。

父親はコップを下ろして、軽く困った顔をしてハツカを見つめて。

「ん？それは君が自分できちんと起きてるじゃないかあ」

「そうだけど……！時計が止まってたの！」

そう言って持ってきた目覚まし時計を大きく前に突き出して見せた。

時計は軸だけが石になってしまったかのように針が止まっている。「電池を入れ忘れたんだねえ、でも僕はその時計に何もしていないんだあ」

それでも父親はおつとりした表情で娘をなだめるが。

「……もういいよ！まずい遅刻するう！」

髪もスカートの汚れもリボンも直す暇も無く

ハツカは靴を履いてかかとを踏んづけたまま少し遠くにある出口まで走った。

父親はそれを目で追う、視線はずっと足元を見て。

「ふむ……まるで少女漫画だねえ」

父親は何となく思っただけと、それを聞いてハツカは振り返り。

「飲酒男……っパパのエッチー！」

何かを勘違いしたハツカはそう言っただけで、父に向かって舌を伸ばし直ぐに外に飛び出して行った。

家に残された父親は、軽く目蓋を閉じて顔を下げる。

そして軽くコップを持って、再び酒を一口飲もうとしたが。

父親は心の中で、先ほどの娘の言葉を思い出す。

「そんなに気に入らなかつたかなあ、僕の酒癖は」

父親は言い終わり、半開きの目でいつの間にかカラになったコップの中を見た。

そして視点は、強制的にハツカへと切り替わる。

「遅刻のハツカ」(後書き)

父親は酒を飲んでもほぼ酔わないようだ
以上遅刻のハツカでした

「初恋のハツカ」(前書き)

初恋の相手、運命の相手
片思いの相手が登場しますよ

「初恋のハツカ」

私の名前は猪瀬^{いのせ}ハツカ、中学1年生で2学期に突入したての平凡顔の美少女です。

もう思春期で、パパの飲酒がすつごく許せないよ！でも今はそんな事言ってる場合じゃなくて

現在は不登校扱いされるギリギリの時間で学校に向かって走っています。

うちの学校には制度とゆう学校の法律があつて、本当に厳しい。

1分遅れただけで不登校扱いで先生から凄く怒られる上、特別勉強部屋で

難しい勉強をいっぱいやらされるんだから！もう嫌になっちゃう！しかも今日は、夏休みが明けた丁度その日だよ、休日ボケでいつもはもっと

早く起きれるんだけど、つい朝の7時まで寝ちゃったんだ。

こんな重要な日に遅刻なんてしたら、いつもの何倍宿題を出されるか。

とにかく私は凄く急いで下り道を走っています。

「遅刻する遅刻〜！」

こんなありきたりな言葉を口ずさみながら、下って直ぐにある左の角を曲がる時。

『そう言えば今日お父さん、少女漫画のようだって言っていたなあ本当にそんな事が起こって、運命の人が実は向こうから走ってきていて

この曲がり角でぶつかったり何てしたら、どんなに感動的だろうなあ』

私は、頭の中でそんな恥ずかしい事を妄想しながら、勢いよく角を曲がった瞬間。

「わっ！」

若々しい男の人の声、そして目の前がフェイドアウトしたかと思うと

何か硬い物の鮮明な衝突音がなり、私の鼻先に大きな痛みが走った。そのあまりの痛さにフラフラと後ろに後退して、コンクリートの地面に尻餅をついた。

「ふ、あああああ……鼻が……」

私は恥ずかしくも誰かの前で鼻を押さえて涙を流した。

目を開けて、私は多少相手に文句を言おうと顔を上げた、けれど相手の顔を見た瞬間、私は、文句を言うのを忘れてしまった。

「……あ」

「ごめん。俺が本持って走ってたから、痛かったよね」

謝ってきたその声は、さえずりのように細く綺麗で、それは私のよく知っている顔だった。

そう、普段は遠くで見ているだけ、一度も話しかけた事の無い憧れの人。

「煎渥先輩……あ、うん、痛かった……」

「ごめんね、じゃあ立てる？」

彼の名前は長谷川煎渥^{はせがわ いり}君

私の通ってる学校の人間なら知らない人はいない。しかも良い意味で。

成績優秀、運動神経抜群、才色兼備、サッカー部に所属している。女子学生どころか男子学生からの人気も高い、学校中の人気者。学年は三年生、私の先輩にあたる人なの。

「……はい、立てます……」

そして、私が運命の相手にするなら申し分無い、片思いの相手だ。

以外に普通に話しかけてるけど、これでも凄くどきどきしてる。自分が今何て言ったのかも、頭からすっぱり抜けてる。

それに、ここで逃げたら多分チャンスも無いよね、私の理性がそう呟いた気がする。

「よかった、それじゃあ立って」

と言つて、煎渥先輩は汚れ一つ見あたらない手を差し出すと優しく笑つて立つように促してくれた。

「鼻は後で学校に言つたら保健室に行こう」

「あ……大丈夫です、鼻は折れていないから……その」

後の言葉は何て言えば、そう思つて少し心の中が混乱して。

「あれ……」

だけど結構直ぐに頭の中で言葉が浮かび上がって、言う事ができた。

私は思つたことを普通に口にした。

「あの、煎渥先輩。どうして此処にいるんですか？」

ただしそれはあまりにも単純な質問だったけれど

よくよく考えれば、先輩がここに居るのはおかしい、だって優等生で通している人が

遅刻ギリギリの時間に、こんな所をほつついている訳が無い。

きつと、担任に資料を貰つて来るよう頼まれたとか、そうゆうやつ。

でも、先輩は呆気ランとした表情をして何故か黙っている、でも直ぐに笑顔に戻った。

そして先輩は理由を教えてくれた。

「あちゃあ、学校の方向逆だったね、あはは」

「そうなんですか……え？」

パパじゃ無いんだから何してるの、このお馬鹿、私はつい心の中で叫んでしまった。

でも直ぐ、煎渥先輩に向かって心の中で何を叫んでいるのと、心

の中で思い直して

一気に自分で立ち上がった、私は勢いよく先輩の手をとった。

「それまじじゃないですか！ 煎湊先輩が遅れたら本当にまじいよ！」

私は必死な思いで煎湊先輩に言葉をぶつけた。

「まあね、でも皆勤賞は狙ってないから……」

「そう言う問題じゃないの！」

煎湊先輩はぼやくけど、私は居ても立っても居られなかった。

だって、先輩が怒られる姿なんて私は見たくないから。

そんな自分勝手かもしれない気持ちで、私は先輩の腕を引っ張りあと10分で、遅刻とゆう時間の中、先輩が逆走してきた道のりを走り出した。

そして物語は、最初の段階へと踏みこまれた。

「初恋のハツカ」(後書き)

角を曲がつてぶつかるベタな展開
以上初恋のハツカでした

「羞恥のハツカ」(前書き)

二人の急接近、煎湮の言葉に何を思つか

「羞恥のハツカ」

ハツカに切り替わっていた視点は、再び元に戻る。

校門には、緑色の繊細な細工が施された威厳を漂わせる、中世風の巨大な門。

それは横に大口を開いており、何かを待つように2本の線の間にとんでいる。

そして、門が作り出した境界線の上に、一人の男が腕時計を見つめて時間を確かめてた。

「時の間まで後9分」

この時間までに遅刻志願者達が一人でも欠ければ、この男はその者達だけならず

ちゃんと登校してきた者まで連帯責任で罰するつもりでいる。

何故なら彼は国語の教師だからだ。時間に厳しく、この学校の

「時間守護」役である男は

生徒の登校人数をきっかり調べてあるとゆう。

そして今日は、夏休み明けの始業式の日である。再び男は時計を確かめた。

「くそ……これはヘタをしでかせば私もクビ決定だな……」

そして男が数えた結果、今年の遅刻志願者の数は、1200人だったとゆう。

しかもその中には、最優等生の煎湊も入っていた。

「いや……本当に首にされるな」

同時刻、煎湊とハツカは延々と続いていく、灰色の道路を黒く横

断っていた。

長距離を得意とする煎湮はまだ余力を残している、しかし、走ると決めた当の本人は、疲れ果ててもう走る気力すらも失いかけていたのだった。

「はあ……足ガクガクだよ、もう走れない……」

ハツカは呟いて、左にヨタヨタ歩き、ガードレールに持たれなかった。

それを見た煎湮は、困ったように微笑んだ、しかし時間は星のように止まらない。

それを分かっている、少し煎湮のペースに合わせすぎたようだ。車の音は現在しない、すると煎湮はあたりを少しだけ見回した、一体何をしているのか

ハツカにはよく分からなかった。そして、見渡し終わると煎湮は少しずつ極力真面目な顔で

彼女に近づいていく。

「え……あの、ちょっと、まって……人がいなくても何か」

何となく察して、慌てるように言葉を口ずさむが、ついに煎湮はハツカの前でしゃがんで。

少しボサボサの髪の中の顔を覗いてきた、もはや鼻と鼻がぶつかってもおかしく無いくらいの距離に。

「あ、あの……」

「自覚してる、俺は学校の人気者だから、こうゆう時にしか出来ないんだ」

細く綺麗な声で俺口調で喋り、ハツカの口に風が吹き込む、きっとこれがさらに女子学生の人気を呼んでいるのだろう。

しかしそんな事は関係なく、意味心な言葉を呟くと、急に言葉を紡ぎだした。

「俺の願いを聞いて欲しい、君は俺がいれば何でもできるよ……それはね」

そして顔を、ハツカの髪の中に顔が入るくらい近づける。

「あ……のお……」

「俺の事が、好きだから」

甲高き喜んでいるともとれる悲鳴が上がった。

ガードレールにもたれかかったまま、顔を熟したイチゴのように赤く染め、前に突き出した手を

上下に振る。直ぐに煎湊から視界を外した。

「はあ……なんなん何でえ？私は貴方の事……別に」

「え……もしかして、好きじゃないの？嫌いな部類だった？」

煎湊は、それは当然の常識なのと言うかのように、首を傾げてキョトンとした顔をする。

「な……！」

まるでハツカの発言の方がおかしいかのような。しかしハツカも考えは曲げれない。

勢いよく立ち上ると、今度はハツカの方から煎湊に接近して。

「もう、貴方の事が嫌いじゃない！でも、いきなりそんな事言われたらほとんどの女の子は……！」

「君は、他の娘のように、俺に簡単に好きとは言わないんだね」

「え……それは」

その瞬間、少し気が登ったのだろう、ハツカは妄想を膨らませて考えてしまった。

何を考えているかは分からない、でも何故か、頬をピンクに染めて俯いている。

けれど、直ぐに煎湊は微笑んでこう言った。

「立てたね、つまり君は俺の事が好きなんだ」

「だからあ……え、本当だ」

ハツカの足からは、先ほどまで感じていた疲労が無かったかのようだった。

どんなに足を曲げても動かしても、疲れの一つも感じさせない。

「もしかして……これが……」

一瞬ハツカは、本当に愛が起こした奇跡なんじゃと小さな声で呟い

た。

「さあ、行こう!」

「……わっ! あの!」

視線をずらしてぶつくさ呟く彼女の手を優しく持って、今度は煎湊がリードして走りだした。

「大丈夫だよ、もう逆走はしないから」

心配そうな彼女を見つめて、優しく微笑む煎湊。

片思いの彼と、今こうしているのは自分だけ、その事実が此処にある。何とか隠しながらも、ほどけた顔をしている。

頭の中は本当に少女漫画の主人公になった気分にいるのだろうか。でもその後、ハツ力はきつと、ある重大な事に気がついてくれるだろう。

「はい、分かりました!」

そして、二人は目前に迫る学校のゲートに向かって、ただひたすら走っていった。

しかし、遅刻までの残りは後5分。

「羞恥のハツカ」(後書き)

それはただの御まじない、それから遅刻話は続きますよ
以上羞恥のハツカでした

「信号のハツカ」(前書き)

四千文字を超えております

余力がありましたらよろしければ読んでいってね

「信号のハツカ」

髪が直ってきて、歳の割には幼い外見をした少女の顔がやっと現れた頃の事。

二人は、学校を目前に並ぶ綺麗に整列した10組の信号機の前にて。

車も通らぬ道路に大きく時間を削られて、立ち往生しているのであった。

待ちくたびれて、少女ハツカの方は小山座りをして、信号の順番を待っている。

少年、煎渥の方は微笑んだ表情を崩さぬまま、少し額から汗が垂れていた。

「……イケメンでも、汗は掻くんだね」

ハツカも少し汗を流す中、軽く朦朧としているのか、小さな声でつい思った事を述べた。

一応昔から彼は運動競技もたしなんでいた為、暑苦しいと感じる競技で

汗を掻く事には慣れているが、運動中の煎渥をまじかでその顔を見るものは少ない。

だから、ハツカにはそれが新鮮さ、そして軽いイメージ崩壊に繋がっていく。

「ん？驚いた？男は汗を掻くんだよ？」

「……え、うん！ そうだね」

ハツカは、当たり前前の事を言われてしまい、言葉につまる。そうこうしているうちに、やっと信号機は青の番に回ってきた。

「行こうか、このまま走って突っ切れば、一気に到着だよ」

ここの信号は連動型で直結しており、他の1基が青ければ全てが青に変わるのだ。

しかし、青に切り替わるまでに少し時間が掛かるのが難点である。
「はい、先輩！……あれ、あの人……」
渡ろうとしたその時。

3番目の信号機の前で、青になったとゆうのに一人佇んでいる人の姿が目飛び込んだ。

「……煎湊先輩、あの人老人みたい！」

ハツカはそれがどうしても気になるのか、一気に3番目の信号機まで走っていった。

「あ、待つて」

煎湊もそれに釣られてついて行く、一応老人の存在には気がついてるようだ。

そして、横断歩道まで行くと、二人は足を止めて佇む人物を見た。

見ればその人はハツカのゆう通り、性別は良く分からないが外見からして髪は全て無く、目蓋がたれさがり目を隠している5歳児くらい背の低い、かなりの老齡のお年寄りだった。

「あの……！もしかして此処が通れないのかな……？」

もしかしたら、目蓋のせいで前が見えていないのかもしれない。

「誰か、待つているんですか？」

「……………」

ハツカは何を考えたのか、タイムリミットが残りわずかな中老年人に声をかけた。

しかし耳も遠いのだろうか、返答は返してくれない。

ハツカは信号機を一度だけ見つめる、少しだけ考えるような表情をした。

考え終わると老人の方を見てこう言った。

「……じゃあ、貴方の行きたい所まで連れてつてあげる！」

「……あと、2分で信号が赤になるから、残り時間はあと3分だよ」
いきなりのハツカの言動を転換を心配したのか、煎湊は時間切れまでの残り時間を教える。

するとハツカは、あつとゆう表情をして煎渥の方に向き直った。ちよつと困つたような顔、父親と同じような目つきになって苦笑う。

「もうそんなに立つたんだ……ごめん」

少し申し訳ないとゆうような表情で、目で老人と片思いの先輩の顔を交互に見た。

「それなら、どうする？」

優しい声で、ゆったりとした口調で喋るけれど、時間は刻々と過ぎていく。

返答に迷っている暇は無い、ハツカは直ぐに答えを出した。

「じゃあ……！先輩は先に行つててください！私はこの人を、今行きたいところ指してるし、終わったら行くね」

それを聞いた少し後、煎渥の顔から微笑みが薄れると、少し真剣な色が浮かぶ。

「……それで、良いのかな？」

「はい！」

真つ直ぐにハツカは煎渥を見た、煎渥はそれを聞くと、またいつもの微笑み顔に戻る。

そして。

「じゃあね」

煎渥は微笑むと、青信号の横断歩道をスタスタと歩いていく、ハツカの横を通り過ぎた。

その後走りだして、信号機4基のあたりを通り過ぎる先輩の姿が目映った。

それをハツカは目で追うが、でも直ぐに視線を老人に移して歩きましょうと敬語で促した。

「ふ、ふぶ……」

老人が何を言っているか分からないが、何となく感謝しているようにも謝っているように聞こえなくも無い。

もしかしたら馬鹿にされているのかもしれない。

だとしてもハツカは老人を一步一步ゆっくり歩道を歩かせていった。

「もう少しよ！がんばって！」

その間にも時間は風よりも早く過ぎていく。

先ほど煎湊が通っていった、4基目の信号機までの道のりが遠い。ハツカの表情はしだいに、切なく少し曇り気の入った表情になっていく。

「……っなぐんてね、俺も行くよ」

耳の近くから、いきなり細く優しい、ハツカの知っている声が響いた。

「……っひゃあん！！」

驚きのあまり、ちよつと可愛い声を上げてしまった。

振り向くとそこには、先に行ってしまったはずの煎湊が、笑いながら隣に立っていた。

「もう、遅刻になるよ！優等生が馬鹿な事したら学校の人達全員が困っちゃうよ！」

「問題、優等生の称号がついた者は、どちらの道を選ぶでしょうか？」

ハツカの質問に言葉を返した、そして。

「正解は、俺が一人では横断歩道を渡れないから、君を手伝うよ。」

ふふ、正解です」

楽しそうな顔で言って、細く優しい声に、さらに涼やかさが足されたようだ。

「そうなんだ……でもありがとう、煎湮先輩！」

それから煎湮の協力もあり、一歩づつ、少しづつ着実に進んで行く。

「わっ！！」

ハツカは、前ばかり見ていたために

地面の白いコンクリートに足が引かかってこけそうになった。

「おっと、こけないでね……」

そのたびに、煎湮はそれ直ぐ反応してハツカを受け止める。

「う、うん……」

「ふぎゅん……」

恥ずかしそうにも、手助けを続けるハツカの方を見ているのか。

何となく相槌をうつ老人。

そんなやりとりがあらながらも。

二人で運んだ結果、思った以上に短い時間で

ハツカの言う目的の、次の横断歩道まで辿りついた。

「ついたあ！」

ハツカは嬉しそうに両手でビクトリーのポーズを取る。

煎湮の方もいつもよりも笑顔に見える、そうして二人で達成感を分かち合う中

今まで黙っていた、とゆうか、人語を解さなかった老人が喋りだした。

「ありがとう、優しいお二方、これで私も、開放されるんじゃないあ」

「……ん？どうゆう事なのですか？」

煎湮は、老人の意味心な言葉に、喋った事への驚きより、疑問が先行した。

「……開放って何がですか？」

ハツカも遅れて質問をした、だが、老人は少し顔を背けてしまっ

た。

触れてはいけない事だったのだろう、二人は顔をあわせて深入りは止めた。

「しかし……お礼はせんとお、老人の性^{さが}じゃあ」

そう言つて老人は、手の平の上に乗る、氷のオブジェクトを煎渾に差し出した。

それは、とても繊細に細やかさを追求して作ったのであろう、薄蒼色に輝く龍のオブジェクトであつた。

「龍の氷の彫像？これを俺にくれるの？」

老人はこくりと頷く。

しかし何故か、ハツ力の方には何も渡さなかつた。

「私は？あの……」

「五月蠅い、君には持ち合わせが無いんじゃ、のちのち渡しちやる」
軽い文句を吐いて、老人は垂れ下がった目蓋を上げハツ力を見つめる。

「何でしょう……？」

ハツ力は少し緊張した顔をするが、老人は二人にこう言つた。

「あと、1分じゃぞ」

時間は進んでいるのに、変な間が生まれ、そして。

「……あ、そうだったあ！！」

「いけない、俺も忘れてたよ」

思い出した瞬間、信号の方を見て、まだ青だと確認すると一気に走りだした。

そんな二人の後姿を、老人は笑いながら見送つた。

「お礼はいずれ渡すぞお、きひひひひ……」

しかし案の定、信号機は6番目の信号で赤になってしまった。

「まずいね……」

煎渥も、暑さとは違う何かで額から汗を掻き始める。

ハツ力はそんな煎渥を見て、少しづつ表情が強張っていく。

「私のせいだね、老人さんを勝手に手伝って、時間を使ったりしたから……」

「君は悪くないよ、俺が勝手に協力したんだから」

「ごんなさい！でも、どうすれば……」

ハツ力は弱音を吐く、それを見つめて煎渥は言った。

「それは、君が決めて」

彼にとつてはどうか知らないが、ハツ力にとつては残酷な一言だった。

例えるならば、死刑台に立たされた片思いの彼を、自分の意思で処刑しなければいけないような。そんな妄想が、少女の頭の中で爆発しそうになっていた。

その時、その光景は丁度、門の前に立つ国語の教師にも見えていたのだった。

「ハア……まさか、あのような老人を助けて、遅刻してしまう者が現れるとは……この赤麻^{せきま}中学校始まって以来の、快拳^{かいけん}だな」

皮肉交じりの発言をし、時計を見ながら男はため息をつく。

「しかも、残りはお前達だけ……あと38秒、以上だ」

妄想の爆発が頭の中で起こりかけている。表情が髪に隠れて見えない。

それからハツ力はゆっくりと顔をあげる、何か不思議な雰囲気漂わせていた……。

瞳孔が信号機の赤色をしっかりと見つめ、瞳の真ん中が赤く染ま

る、そして小さく呟いた。

『全部、今すぐ青信号になれば良いのに……』

そうだねと、諦めた表情で呟く煎湮^{いり}。

その時、自分達の背に向かう信号機の、赤くもれる光が消えた。
その代わり、青い光が右端から漏れ出す。
そして、綺麗に整列した信号機が、まるで踊りだすかのように。

赤の信号が次の瞬間、10組全てが青信号になってしまった……。

「……………凄い」

流石に驚きを隠せないか、煎湮は顔が釘付けになった。

そしてもう一人、驚くハツカの顔を見て、楽しそうにはしゃいだ。
「凄いよ、壊れたのかな？全部本当に青になったよ！」

「……そんな事はどうでも良い！……行くよ先輩！！」
最後のチャンスと思ったか、はしゃぐ煎湮をよそに一気にハツカは走り抜ける。

煎湮も、信号機を見上げながら器用について行った。

それを遠めから、学校側にいる者では唯一、男はその瞬間を目撃してしまった。

「……信号機が……おかしい、1億ボルトの雷撃にも耐性を持つているとゆうのに……」

だが信号機の青い光に、男も一瞬だけ目を奪われた、何故か少しだけ口元がにやけて。

「……あっ」

男は正気に戻ると、キツイ目つきでこちらにダッシュで駆け込ん
でくる

二人の生徒を見た。

だが、男は少し残念そうな表情をしてため息をつく。
再び時計の針を見て。

「俺的にも残念だが、もう遅い……あと、1秒……」

距離からして、二人はもはや校門まで届くわけが無かった。

男は、何かを覚悟したような表情をして、目をつむった。

そしてカウントダウンが、終わりを告げようとした。

「……………ぜ……………」

「到着うつつうー!!」

「うん、ギリギリセーフだったね」

男が何か言おうとしていた頃、出席人数は、規定値に達した。

「……………」

「あ、国せんせい!!おはようございます!」

「おはようございま……す……はあ、トリセラ先生、疲れた……」
片方の生徒は楽しそうに、もう一人の生徒は疲れきった状態で、
校門の内側でお茶を濁す、一方その頃。

トリセラ先生は、頬を淡い桜色に染めて、目をつむり続けた。

何でもいきなり決め付けるのは危険だよね。

「信号のハツカ」(後書き)

車が全然走っていなかったから、迷惑にならなくて良かったよ
以上信号のハツカでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241y/>

妄想のハツカ

2011年11月12日03時27分発行